

Makiko Tomita, Cello & Yasuko Harada, Organ Duo Concert 2021

富田牧子 原田靖子 デュオコンサート
2つのチェロと2つのオルガン

2021 年 1 月 1 1 日（月祝） 1 4 時開演

松本市音楽文化ホール（ザ・ハーモニーホール）

【主催】MA 企画

program

第1部 ～バロックチェロとポジティブオルガンで聴く J.S. バッハ～

J.S. バッハ：アリオソ [カンタータ 156 番『わが片足すでに墓穴に入りぬ』より シンフォニア]

J.S. Bach (1685-1750): Arioso [Sinfonia from “Ich steh mit einem Fuß im Grabe” BWV 156]

J.S. バッハ：無伴奏チェロ組曲 第1番 ト長調 BWV 1007

J.S. Bach: Suite for Cello Solo No.1 in G major BWV 1007

**J.S. バッハ：ヴィオラ・ダ・ガンバとオブリガートチェンバロのためのソナタ
第3番 ト短調 BWV 1029**

J.S. Bach: Sonata for Viola da Gamba and Obbligato Harpsichord No.3 in G minor BWV 1029

*** 休憩 15分 ***

第2部 ～モダンチェロと大オルガンで聴く 19、20世紀の音楽～

J. ラインベルガー：6つの小品 Op.150 より

「夕べの歌」「パストラーレ」

J. Rheinberger (1839-1901): “Abendlied” “Pastorale” from Six Pieces for Violin and Organ Op.150

C. フランク：大オルガンのための6つの作品 Op.18 より

「前奏曲、フーガと変奏曲」

C. Franck (1822-1890): *Prélude, Fugue et Variation* from Six Pieces for Organ Op.18

G. カサド：トッカータ (G. フレスコバルディの様式による)

G. Cassado (1897-1966): Toccata in the Style of G. Frescobaldi for Cello and Piano

本日は私たちが企画する第一回のコンサートにご来場いただきありがとうございます。
みなさま、新しい年をどのようにお迎えになられたでしょうか。

コロナウイルスの大流行によって、人間が作り上げてきた経済を中心とする社会は大打撃を受け、私たちは目に見えないものに弱いことを痛感しました。その一方、私たちは生き物の温もりや声、励ましや触れ合いを必要としており、目に見えないものが心を豊かにし、生きる力になることに改めて気づかされます。音楽は目に見えない芸術。演奏するたびに過去の音楽家の精神に出会い、新しい音の命が生まれることに感動します。毎日毎時間違う顔を見せてくれる山の風景を知る信州の方は、その感動をよくご存知でしょう。

一本一本手作りされたパイプに風を通すオルガン、木から削り出されたチェロ、そしてガット（羊腸）弦は、現代社会のシステムとは真逆の特徴を持ちます。人間同様それぞれ違いがあり、響きやすい音や出にくい音など凹凸、陰影があります。いい楽器は、演奏者の心身の動きに反応し、楽器の中に秘められた潜在的な能力が演奏者をさらに高めてくれます。

演奏者とお客さま、4つの楽器、音楽作品、そしてこの素晴らしい音響のホール。全てが揃ってコンサートの日を迎えられたことを心から嬉しく思います。



曲目紹介

プログラム前半は、バロック時代も終盤を迎えた頃ドイツで活躍した J.S.バッハの作品を、バロック時代の様式で調整されたチェロ（とバロック弓）と、その時代に合奏用のオルガンとして使われていたポジティブで演奏します。

1729 年 1 月の顕現節（公現）後第 3 日曜日の礼拝で演奏されたカンタータ『わが片足すでに墓穴に入りぬ』から、第一曲シンフォニア。後世の人が編曲し、アリオソと呼ばれて親しまれています。

1720 年頃書かれた 6 つの**無伴奏チェロのための組曲より第 1 番**。前奏曲と 5 つの舞曲から成っています。1600 年代後半からチェロは独奏楽器としても使われるようになり、優れたチェロ奏者が伴奏を伴わない独奏曲を含めた作品を残しましたが、このバッハの組曲の音楽的内容は格別です。

ヴィオラ・ダ・ガンバはチェロと同様、膝に挟んで弾きます。6 本（または 7 本）弦を持ち、左指で弦を押さえる指板にフレットがあり、4 弦のチェロが 5 度で調弦されるのに対し、4 度（間に 3 度がある）の調弦。弓の持ち方は、現代のチェロはオーバーグリップで（上から）持ちますが、ガンバはアンダーグリップ（下から）です。弓で弾く弦楽器としては、18 世紀以前はチェロを含むヴァイオリン属よりもガンバの仲間（ヴィオール属）が主流で、王侯貴族の間で人気の高い楽器でした。この時代のソナタでは、旋律楽器のパートと鍵盤楽器（チェンバロまたはオルガン）のバス（低音）パートのみが書かれ、鍵盤奏者は右手の和音と節を即興して演奏していました。**ヴィオラ・ダ・ガンバとオブリガートチェンバロのためのソナタ 第 3 番 ト短調**では、鍵盤楽器パートにも独立した 2 つの声部が置かれており、緻密な 3 声部の対位法が展開されています。弦を爪で弾くチェンバロの音色とは違う、音を持続することが可能なオルガンとの室内楽をお楽しみください。

後半は、近現代の様式で調整されたチェロ（とモダン弓）と大オルガンによる演奏です。

ヨーゼフ・ラインベルガーはリヒテンシュタインの首都ファドゥーツに生まれた、この国を代表する作曲家です。5歳で音楽を学び、7歳で地元のオルガン奏者として任命され、演奏するために作曲も始めました。その後ドイツのミュンヘンの音楽院で勉強し、20歳で音楽院の教師となります。彼は多作で、オルガンだけでなくオーケストラ、室内楽、ピアノ、声楽、合唱、宗教曲など多岐に渡ります。**ヴァイオリンとオルガンのための6つの小品**は1887年に書かれました。**タベの歌**は、深く落ち着いた独特な感情が、温かな調性（変ホ長調）によって表現されています。**パストラレー**（田園曲、牧歌）はオルガンの持続する低音の上で、自然からインスピレーションを受けたかのような旋律が奏される、瞑想的な音楽です。

セザール・フランクはベルギー生まれで、父方の祖父はドイツ系でした。早熟な彼は、幼少期から音楽教育を受け、パリの音楽院で学びました。1858年、パリのサン・クロティルド教会のオルガニストに任命されます。ここにあるカヴァイエ・コル製作によるオルガンの音色に創作意欲を掻き立てられ、典礼用の音楽の作曲に集中します。典礼後に行われる彼の即興演奏に会衆は喜びました。その即興を楽譜にまとめたのが、その後2年かけて書かれた**大オルガンのための6つの小品**。フランツ・リストはこれを聴いて「バッハの傑作と並ぶべき作品」と絶賛。カミーユ・サン＝サーンスに献呈されました。3曲目の「**前奏曲、フーガと変奏曲**」はのちにハルモニウムとピアノのために編曲されました。

プログラム最後は、20世紀のチェロの巨匠、スペインのカタルーニャ州出身の**ガスパル・カサド**作曲の**トッカータ**。16世紀後半から17世紀前半にイタリアで活躍した作曲家・オルガニストのジローラモ・フレスコバルディが、オルガンかチェンバロのために書いたトッカータを、カサドがチェロとピアノのために編曲した、として1925年に出版されました。原曲は見つかっていないので、フレスコバルディの様式を模して作曲したカサド自身の作品だと思われます。チェロとオルガンで演奏するアイデアは、きっと彼も喜んでくれるでしょう。（富田牧子）



感染予防対策のためのお願い：

＊客席には他のお客様と十分距離をとってお座りください。会場内での会話は控えめをお願いします。
＊チケットの裏面（チケットぴあでお求めの方には、受付で来場者カードをお渡しします）にお名前、ご連絡先、座席番号をご記入のうえ、お帰りに回収ボックスへお入れ下さい。